

として記載した。

トウダイグサ科は非常に大きな科で、多分に異なるものを含んでいると考えられているが、その材構造も極めて多形である。その中で、ニセホバシライシヤ本化石は、小倉謙先生や亙理俊次先生も言っているように、コミカンソウ亜科のカンコノキ属、コミカンソウ属、またハズ亜科のアカギ属などによく似ている。これらの仲間で大木となるものは、現在ではいずれも熱帯から亜熱帯に分布している。従ってこれらの化石種の存在は、それらが生育していた当時の、現在より温暖な気候の存在を示しているのかも知れない。

なお、本研究の遂行にあたっては、神戸市教育研究所の前田保夫先生に種々の便宜および教示をいただいた。ここに記して感謝いたします。

□阿部近一：徳島県野草図鑑<下> 319 pp. 1984. 徳島新聞社, 徳島, ¥2500. 昨年8月に出版されたものの続編で、各頁1種、時に2種が分類順に配列され、カラー写真に簡単な解説がつけられている。  
(金井弘夫)

□宮本 淳(訳)：レオ・レオーニ、平行植物(Leo Leoni: La Planta Parallela) 307 pp. 1980. 工作舎, 東京, ¥1,800. 私のところは博物館だからいろいろな質問がくるが、慶応大学経済学部の学生が「平行植物について知りたい」と本を持ってやって来たのには少々驚いた。同校の一般教養物理で指定図書になっているとのことである。本書は一見学術書のような体裁をもっているが、植物学の本ではない。すべてが著者(イタリアのグラフィック・デザイナー)の空想、と言って悪ければ思索の産物である。それにしても発見のいきさつ(たとえば、1970年大阪大学の上高地清正は奈良の久茂山でフンギネ *Anaclea* を発見した)、研究の経過、進化の径路、植物の学名、土名(たとえば、*Artisia magistra* マネモネ科マイヒメマネモネ……学名のリストがついているが、現行の属名と同じ綴りのものは一つもなかった)、学会の模様(たとえば、1982年に東京で国際平行植物学会議が開催される)、引用文献、年表といった具合に、植物を知らない人が読んだら本当にこういう植物があると思ひ込みそうである。非ユークリッド植物学とも言おうか。翻訳者は大変だったことだろう。非ユークリッド幾何学は思考の産物から実在となったが、平行植物は植物学では認知されることはないだろう。芸術的な認識論として頭の体操のつもりで読めばよいのだけれど、私の頭はそれほど柔軟ではなかった。  
(金井弘夫)